シピオーネ・アマーティ著「日本略記」（手稿）における考察
――ルイス・デ・グスマン著『東方伝道史』（一六〇一）からの引用について――

小川　仁

はじめに

慶長遣欧使節（一六一三～一六二〇年）は、二〇一三年十月に解纜四〇〇周年をむかえた。二〇〇九年から二〇一〇年にかけて京都・東京で開催されたボルゲーゼ美術館展における支倉六右衛門常長像の展示、および二〇一〇年に出版された『仙台市史　特別編八　慶長遣欧使節』では使節の多角的論証が試みられ、二〇一三年には仙台市をはじめとして各地で記念行事やシンポジウムが開催されるなど、近年、慶長遣欧使節への関心が俄に高まりつつある。

ここで取り上げるシピオーネ・アマーティ（Scipione Amati 一五八三～一六五三年頃）[1]は、使節がマドリッドからローマに至る際、通訳兼折衝役として半年間同行したイタリア人である。彼は使節とローマで別れてから、自らの体験を踏まえて『伊達政宗遣欧使節記』[2]という慶長遣欧使節に関する報告書を出版しており、これは現在でも慶長遣欧使節を研究する上での基本史料とされている。その著作の史料的価値が認められている一方で、アマーティのテキストの本格的な研究は、先述した『仙台市史』における『伊達政宗遣欧使節記』の新訳[3]、使節を主導したフランシスコ会士ルイス・ソテーロ（Luis Sotelo　一五七四～一六二四年）の報告書と『伊達政宗遣欧使節記』との関連性を論じた平田隆一による論考等[4]、それほど多くはない。ヴァチカン文書館（Archivio Segreto Vaticano）に収蔵されているアマーティの未刊の手稿「日本の自然、宗教、政治、その三つの状態についての簡便なる記述」（*Breve Ristretto delli trè Stati Naturale, Religioso, e Politico del Giapone, fatto, et ordinato dal Dottor Scipione Amati Romo interprete, e Relatore dell'Ambasciata del Rè Idate Masamune Rè de Voxu*

regnāte nel Giapone…, 以降「日本略記」と省略する[5]）が著され、数篇の政治論文[6]が出版されている以外は、マッツケッリ（Mazzuchelli）が編纂した人名辞典[7]において極めて簡単に紹介されるのみで、経歴の詳細は明らかにされて来なかった。アマーティは、慶長遣欧使節との邂逅直前にマドリッドのヴィットーリア・コロンナ・デ・カブレラ（Vittoria Colonna de Cabrera　一五五八～一六三三年）の邸宅においてタキトゥスに関する政治論文の執筆[8]を進めており、一六〇九年から一六四八年にかけて出版された数篇の政治論文には、いずれにもコロンナ家を称揚する記述を遺している。これらの事実から、アマーティが政治に関心があったことは言うに及ばず、コロンナ家とのあいだに単なる主従関係以上の結びつきがあったことは想像に難くない[9]。これを受けて、筆者はコロンナ家の文書を多く収蔵しているコロンナ文書館（L'Archivio Colonna）に着目し、文献調査を実施した。コロンナ文書館はローマ近郊ズビアーコ（Subiaco）の聖スコラスティカ修道院（Monastero di S.Scolastica）図書館に併設されている。当該文書館において数度に亙る調査の結果、これまで経歴不詳とされてきたシピオーネ・アマーティ関連の書簡等一一九通（一六〇九～一六五三年）、他アマーティ家一族による書簡一一〇余通を発見するに至った。

本論文では、最初にコロンナ文書館で発見した新出史料を参照しつつ、「日本略記」の内容を詳述する。次いで「日本略記」と多くの類似箇所が認められるルイス・デ・グスマン（Luis de Guzmán 一五四三～一六〇五年）著『東方伝道史』（一六〇一年[10]）との比較を試み、「日本略記」第一章、第二章に該当する「博物誌」（stato naturale）、「宗教誌」（stato religioso）における典拠の形態の分析を進めるとともに、アマーティの著述意図の一端を考察していく。

そして、スティーヴン・グリーンブラットが『驚異と占有[11]』において取り上げている「仲介者[12]」の文脈を念頭に置きつつ、十七世紀当時における東西世界の「仲介者」であった宣教師から引き継がれた情報の伝達・咀嚼過程の有り様を分析し、アマーティが密に接していた十七世紀イタリアの有力者に見られる異文化受容の一端を解明する。

第一章　シピオーネ・アマーティと「日本略記」

第一節　シピオーネ・アマーティの経歴

筆者によるコロンナ文書館を中心とした調査により、これまで不詳とされてきたシピオーネ・アマーティの経歴が明らかになりつつある。ここで、筆者がコロンナ文書館で発見した史料の一つ、ヘスス・マリア（Jesus Maria）著「ヴェーロリ司教区におけるシピオーネ・アマーティの昇進に関する評価書」（以下、「評価書」と略す[13]）を取り上げておきたい。この手稿は、全八葉で構成されている。イ

タリア語の前半三葉では、コロンナ家と小都市ヴェーロリとの間に勃発した境界紛争の調停役としてアマーティを取り立てる旨を、コロンナ家当主に強く促した推薦状の体裁をなしている。後半五葉は表記がラテン語へと変わり、アマーティの出生から一六二〇年代までの経歴が極めて詳細に記されている。経歴抄訳は以下のとおりである。

一五八三年十二月六日日曜日、トリヴィリャーノに出生、従軍聖職者（一五九八年）を経て、ラテン語、人文学、法学（聖俗双方）を学んだ後、一六〇六年にイエズス会ローマ学院においてアントニオ・サンタレッロ（Antonio Santarello）神父から道徳神学「良心例学」の講義を受けている。[14] 博士号取得後は、アスカニオ・コロンナ枢機卿のラテン語及び使徒書簡の家庭教師となった。また所属先の「サンタ・ウマニタリア」アカデミーでは、タキトゥスの講義を担当、一六一三年には司祭に叙階された。マルティノ・コロンナの治めるナポリ近郊へ赴いた際には、現地の紛争解決に尽力、マルティノ・コロンナの子息カミッロの家庭教師も努めており、タキトゥスとティトゥス・リヴィウスについて講義を行っている。

さらには、タキトゥス著『歴史』『年代記』についての政治学的論考、及び『イタリア統治における十二状況』を執筆、[15] シチリア滞在時にはサンタ・クルス・マルキオーネにラテン語の政治論文を献呈、[16] 講義した。マドリッド滞在中にスペイン宮廷に出仕する教皇庁駐在マドリッド大使アントニオ・カエターニ（Antonio Caetani 一五六六～一六二四年）の推薦を受け、慶長遣欧使節通訳兼折衝役に就任し、慶長使節がローマ滞在中に『奥州国王の使節、及び国土の歴史』（*Historia Legationis et Regni Regis Voxij*）[17] を編纂、それを教皇パウルス五世に献呈し、その報酬として七十五ドゥカートを拝受、次いで「日本の国々、及び皇帝の自然、宗教、歴史についての小冊子」（*Libellu' de state Naturali, Religioso et Politico Iaponici Regni et Imperij*）をボルゲーゼ枢機卿に献呈したと記載されている。[18]

「評価書」内での慶長使節に対する言及は続き、「アマーティは秘密とされていた使節の目的、隠匿されていた奥州国の政治状況について秘密裏にパウルス五世に報告している。なお、これらの報告は匿名人物の主導によって編まれたものであり、アマーティの他に教皇側近シピオーネ・コベッルチオ、ジョエ・バプティスタ・コスタクートも使節派遣の真実をよく心得ていた」[19] とも記されている。これにより、教皇への『伊達政宗遣欧使節記』献呈とともに、アマーティが諜報員的性質を帯びた情報仲介者として教皇庁との関係を持っていたことも窺い知ることができる。[20]

以上のように、アマーティのキャリアを概観していくと、学識を身に付けた上で聖職者として、そしてコロンナ家の家臣として忠実に仕え、各種の交渉・折衝に従事したことが見て取れる。コロンナ家において人文学の家庭教師を努め、著述面でも数々の業績を残し

ており、『伊達政宗遣欧使節記』、「日本略記」執筆時におけるアマーティの異文化への興味・関心と、彼が培ってきた教養が深く結び付いていることがわかる。

第二節　「日本略記」の概要

ヴァチカン文書館に収蔵されている「日本略記」の記述内容は、一部の研究者により認識されていたものの、その伝来は全く不明とされてきた。しかしながら上述の評価書内に見られるラテン語による日本報告『日本の国々、及び皇帝の自然、宗教、歴史についての小冊子』と「日本略記」すなわち『日本の自然、宗教、政治、その三つの状態についての簡便なる記述』の両タイトルを並べて瞥見する時、そのタイトルの類似性から同一著作であることは明らかと言える。「日本略記」がアマーティによってボルゲーゼ枢機卿に献呈された後、ヴァチカン文書館ボルゲーゼ文書に収蔵され、今日に至っていると断定して差し支えないであろう。従って、この手稿「日本略記」はアマーティの直筆の報告書である可能性が高く、パウルス五世に献呈された『伊達政宗遣欧使節記』とほぼ同時期、一六一五年末から一六一六年二月あたりまでの間に執筆したものと推察することができる。

では、以上のような経緯を持った「日本略記」とは、いかなる著作であったのか。「日本略記」は、「博物誌」（Stato Natvrale）十二葉[21]、「宗教誌」（Stato Religioso）二十二葉[22]、「政治誌」（Stato Politico）四十五葉の合計七十九葉[23]から構成されている。政治誌に全体の五十八％が割かれていることから見ても、アマーティがこの書をまとめた主たる目的は、「政治誌」の執筆にあったとみてよいだろう。この著作の概要を「博物誌」から順に見ていきたい。

「博物誌」

「日本略記」において「博物誌」の占める割合は、全七十九葉のうちの十二葉と、決して多くはないが、それに反比例するかのように記されている内容は、地理、習慣、風俗、食生活、住居と大変多岐にわたっている。以下に、その内容を分類列挙し、要約していこう。

地理

・日本の位置、緯度について言及し、日本列島の主な島々、日本と中国、高麗（Corai）、琉球（Leguio）との位置関係・距離や、地震が頻発すること、また金銀が豊富に産出されるなどに触れている。九州、四国（Xicoco）、本州について述べている一方で、都（Meaco）以東は全く不明であると説明。

食生活と農業

・日本人が常に戦という人災に晒されながらも、主に米を生産し、それが豊かに実ることに触れながら、米から作られる酒と茶

（Chia）を嗜んでいたことに言及。

・狩りで仕留めた獲物以外は獣を口にせず、牛乳も飲まないことについて、ヨーロッパの食べ物や嗜好品の臭いを日本人が嫌いだからだとしている。

・貧者と富者との食生活の違い、病人には魚や牡蠣を食べさせることに着目し、治療がヨーロッパで用いられていた瀉血のように全く血を流すことがないのは偶然ではないと評価している。

住居、服装

・豊富に採れる杉によって建物は全て作られ、壁も床も同様で、日本人はそこで寝る。木材から出来ている豪華な祭壇（仏壇）を家の中に設える。

・服装は豪華な上に、どの国とも異なっており、一年に二回、衣替えがあるとしている。[24] 上流階級の住居、服装にしか触れていない。

慣習、風俗、人間性、言語

・髪形においては、男性が髷を結い、上流の女性は髪を解けた状態にしている。女性のお歯黒についても触れており、黒を歓喜の証、赤を憂鬱の証としている。[25]

・日本においては刀がダイヤモンドよりも価値があるものである。戦で用いる武器は多種多様であり、そのどれもがヨーロッパのものよりも優れている。

・日本人は名誉、礼節を非常に重んじるため、様々な儀式や場面において、礼節を持った言葉遣いが出来るように、賛辞の例文集のような本を使って勉強する。

・年長者を尊び、苦痛や不幸に対して信じられないほどの忍耐力を持っている。

・日本人には本音と建前が存在し、気が短く、一般市民は領主の横暴に振り回されているが、才気は東方のどの民族よりも優れていると示唆する。

・年齢の違いや、貴賤、男女違いによって、言葉遣いは異なり、その場に相応しくない言葉遣いをすると嘲笑の的になる。

「宗教誌」

二十二葉からなる「宗教誌」は、日本の起源の説明から始まる。その内容を簡便にまとめると以下のようになる。ユダヤ人がエジプト脱出したのと同時期に、イサナギ（Isangui）とイサナミ（Isanami）という中国出身の夫婦が偶然日本列島に移り住み、日本の歴史は幕を開ける。その後、日本人同士で諍いが生じたため、従来採用してきた共和制から、内裏（Daire）という君主を置くこととなった。内裏は法を整備し、統治秩序の構築に努めたが、治めている六十六国の中には反乱を起こし、内裏を自称する者も現れるようなる。内裏は中国の統治制度を真似たものであったが、それだけでは内裏の品格や尊厳を維持することができず、そこで導入されたのが宗教によ

る統治であった。坊主（Bonzi）や聖職者は、宗教による統治の管理下に置かれ、内裏は教皇のような役目を担うようなり、枢機卿と同じような役割を果たす公家（Cunge）が据えられた。そして、内裏は品格や名誉としての存在となり、政治的統治は皇帝に一任するようになった。[26]

このように概略を述べた上で、内裏の婚姻制度、内裏が神聖な称号を与える権利を有しているなど、内裏の性質を簡単に解説し、内裏の下につく宗教、殊に仏教の内実を事細かく解説していく。具体的には、仏教が中国から持ち込まれ、日本にどのように広められていったかを踏まえた、坊主たちの慣習、地位役職、教育機関、宗派などの解説である。

つまり、禅宗（Xenxus）、浄土宗（Xodoxius）、法華宗（Foquexus）、一向宗（Icoxus）といった宗派、さらに宗派ではないが、山伏や根来衆（Negoros）についても詳しく言及され、経についても“Namu, Amida, Buth”“Namu, Mio, Ieren, qui, quio”[27]と簡単に述べられている。これらのことを解説したのち、一五九六年のサン・フェリペ号事件、その後の秀吉によるキリスト教徒迫害、都の近くに住み潤沢な収入を得ている高僧などの様子に触れ、「宗教誌」は些か唐突なかたちで締めくくられている。

以上を踏まえると、「宗教誌」で留意すべき点は、宗教そのものを論じるというよりは、日本の統治機能にどのように宗教、殊に仏教が組み入れられていったかについて注目し、詳しく論じている点にあることは明白である。これは、先にも触れているように歴史学者であるアマーティの政治に対する関心が多分に含まれているためと推測される。

「政治誌」

「政治誌」は「日本略記」全体の半分以上を占めており、先述のように、アマーティが日本に対して最も関心を寄せる部分であるといえる。より詳細に見ておくことにしたい。

「政治誌」は、まず「宗教誌」において軽く触れられた内裏の起源をより細かく説明するところから始まり、具体的な国名（尾張Boari など）を列挙しながら、どのような過程を経て多くの国々に分かれたのかを述べている。日本における身分を支配階級と被支配階級に分けて説明し、それぞれの職務、相互の関連性に触れており、内裏の説明においては、内裏が極めて理性的であり誰からも崇拝される存在で、内裏による統治体制がスパルタ、古代ギリシア、ローマに勝るとも劣らないとしている。[28]一方で、「宗教誌」では仏教と内裏の関連性を中心に日本の政治史の展開を論じていたが、「政治誌」では内裏と時の権力者との関連性を重視しながら説明を進め、最終的に戦国時代の権力者（天下）の統治方法を具体的に記述していくとともに、戦国時代の権力者による統治は、民衆を顧みず、内

裏の権力を形骸化させた暴政であると示唆している。

その具体的記述としてアマーティは「政治誌」七十二表～七十二裏において、徳の無い君主に対して否定的な見解を述べている。一方で、そのような否定的見解に留まらず、日本の統治の性質をさらに詳しく述べた上で、タタールや中国、シャム、ペグーなどの国々のように、決して外部から侵略されることなく、日本は不安定な政治状況にありながらも広範な統一政権が存在しており[29]、それを驚くべきことと評価し、その統治体制に注目を置いているところもアマーティの記述の特徴の一つといえよう。

次に日本における統治の具体的な性質に対するアマーティの捉え方について見ていきたい。内裏の統治の性質と対比させて、織田信長や豊臣秀吉といった権力者の性質に言及している。その際に、violenza（暴力）といった「負」のイメージが伴う視点から深く捉えようとする記述が各所に認められるのだが、日本の不安定な時代の中にあってアマーティは、内裏という宗教権力と、秀吉などの俗世の権力者（Imperator）との係わり合いから、日本の統治を俯瞰しようと試みていることがわかる。したがって、スペインと教皇領のはざまで、微妙なかじ取りを迫られていたコロンナ家やボルゲーゼ家等有力者を取り巻く不安定な政治状況と重ね合わせて、政治的な糸口を見出そうとしたのではないかと推察することが可能である。他方、「宗教誌」において内裏を Papa（教皇）のような Presidente（頭目）であるとし[30]、「日本略記」全体において、秀吉などの天下を支配する権力者を皇帝（Imperator）としつつ、神聖ローマ皇帝を視野に入れながら論じている[31]。このような対置のレトリックは、来日したイエズス会士の書簡に多数認められるものであるが、アマーティもこうしたレトリックを積極的に運用することにより、日本の政治と宗教（神道と仏教）との関係を、ヨーロッパにおける俗世の政治とカトリックとの関係に置き換えて理解を深めようとしていた傾向が認められる。

このように見ていくと、アマーティがヨーロッパにおける教皇と世俗権力との関係性を視座に据えつつ、日本の統治が名目上の統治者である内裏と実質上の権力者である皇帝とによって行われていることに注目し、皇帝による統治が不安定で圧制的な側面を帯びつつも、日本にあってはそれが現実的に相応しい統治であると捉えようとしていたことがわかる。この点に関しては補足として、ローマの元首政への移行と、キリスト教の政治に対する影響を例に取り上げて論じている。そうしたなかで、アマーティは不安定な政治状況に対し有益となり得る規範として、「神の教えによる統治」という、キリスト教至上主義的な宗教政治思想を持ち出そうとしていたのではないかと考えることができる。以上から、慶長遣欧使節との邂逅が契機となったか否かは定かではないが、アマーティ自身が、聖職者の立場から日本の織豊政権期の政治状況に対して特別な関心を寄

せていたことは明らかといえる。

第三節「日本略記」とボルゲーゼ家

以上のことと併せて、「日本略記」がボルゲーゼ枢機卿に献呈された事実にもう一度注意を払うと、別な可能性も見えてくる。すなわち、枢機卿を含めたボルゲーゼ家全体にも日本の政治に対する関心が少なからずあり、ボルゲーゼ家の要請のもとに「日本略記」が編まれた可能性である。ヴァチカン文書館のボルゲーゼ文書には、十六世紀中葉から十七世紀初頭に書かれたと思われる手稿の論文集が多く収蔵されている。例を挙げれば枚挙に暇がないが、古今東西問わず事例を取り上げ、広汎に政治の方法論を説いた『修道士トマッソ・カンパネッラ著、全政治技法における一五〇の方法概念』*Cento Cinquanta Concetti methodici dell'universa scienza politica di Frà Tomasso Campanella*[32]を筆頭に、ギリシア・ローマ時代の政治状況に対する分析や、ハンニバルによるイタリア侵攻時の共和制ローマの対処について具に考察が加えられている「歴史・道徳論集」*Discorsi storici e morali diversi di autori*[33]、「作者不詳、コルネリウス・タキトゥスについての政治論文」*Discorsi politici di un anonimo sopra Cornelio Tacito*[34]といったものまであり、そのジャンルは実に多彩である。

なお、先に取り上げたカンパネッラの著作は、『政治警句集』(*Aforismi politici* 一六〇一年)と内容が同一であり、ボルゲーゼ家関係者が何らかの機会を得て、『政治警句集』を当該手稿として書き写したものと思われる。当該著作で特筆すべきは、カンパネッラがアマーティと同様の視点から日本の政治状況について詳しく論じていることなのだが、紙面に限りがあるため当該論点については別に機会を設けて詳細に分析していきたい。若干議論が逸れてしまったが、以上に列挙した著作群からは、過去の事例や最新の政治思想から貪欲に政治的教訓を引き出そうとしていた形跡が多少なりとも認められる。

一方で、十七世紀初頭の教皇庁は、世界各地で宣教活動に従事するイエズス会や托鉢修道会よりもたらされる海外情報であふれており[35]、当時のボルゲーゼ家が教皇パウルス五世(Paulus V 一五五二〜一六二一年、ボルゲーゼ家出身)を通して積極的に対外情報を入手していた可能性は少なからずある。日本記述が含まれるカンパネッラの著作、「日本略記」共々ボルゲーゼ文書に収められている事実も、このような教皇庁を取り巻く環境と深く結びついていると推察するのはあながち間違いではないであろう。

このような諸々の背景に鑑みれば、アマーティ、ボルゲーゼ家双方における日本の政治状況という共通の関心事項を媒介として、書き手であるアマーティが積極的に異文化情報の咀嚼を試みる態度でもって知識を供給し、読み手であるボルゲーゼ家は己の関心に従いそれを享受、時には書き手に対し得たい知識を要求する相互関係、

すなわち知的需給関係が成立していたのではないかと推測することができる。次章ではこの知的需給関係の一部を、アマーティが「日本略記」、とりわけその「博物誌」と「宗教誌」において非常に多く引用している、ルイス・デ・グスマンの『東方伝道史』との比較を通して考察していくことにする。

第二章　グスマンとアマーティ、日本に対する両者の眼差し

第一節　グスマンと『東方伝道史』

これまでの議論において「日本略記」が、「政治誌」に主眼を置きつつアマーティとボルゲーゼ家双方の日本に対する政治的関心のもとに編まれた著作であることを指摘してきた。その一方で「日本略記」は「事由書」内の記述から察するに、『伊達政宗遣欧使節記』の執筆から時を置かずしてボルゲーゼ家に献呈しなければならなかった。そのために短時間のうちに書き上げねばならず、ヨーロッパで既に刊行されていたイエズス会士らの報告書、年報、書翰を参考にし、グスマンの布教史も参照文献の主要な選択肢になっていたことは想像に難くない。「日本略記」におけるクズマンからの引用は、著作の主要部分から外れる「博物誌」と「宗教誌」にその傾向が顕著に認められ、引用というよりもむしろ抜粋に近い記述が多く見受けられる一方で、抜粋とまで言わないまでも、内容レベルで一致するほどの引用が非常に多く認められる。『日本イエズス会書簡集』[36]所収のフランシスコ・ザビエル（Francisco Xavier　一五〇六～一五五二年）書簡、コスメ・デ・トルレス（Cosme de Torres　一五一〇～一五七〇年）書簡、ガスパール・ヴィレラ（Gaspar Vilela　一五二五～一五七二年）書簡の記載にも若干の類似が認められるが、『東方伝道史』からの抜粋ほどの一致には至っていない。

しかしながら、これらがグスマンからの抜粋や引用により手短にまとめられていたからといって考察に価しないというわけではない。そこで本項では、あえて「博物誌」と「宗教誌」に着目し、アマーティとグスマン両者の記述の差異からアマーティの著作意図を分析していきたい。

まず、比較テキストとして用いる『東方伝道史』の著者ルイス・デ・グスマン（一五四三～一六〇五年）の経歴に軽く触れておきたい。バレンシア、オソルノ村出身。一五六三年、アルカラ大在学中に同地でイエズス会に入会。イエズス会のアルカラ学院で学問を修め、司祭に叙階される。一五七三年以降、ベルモンテ学院長、イエズス会アンダルシア管区長等を務めるが、病気のため一旦第一線を退いた。病状回復後一五九四年にアルカラ学院長、翌年イエズス会トレド管区長を歴任、次いでイエズス会総長アクアヴィヴァのスペイン管区助手に任命されている。一六〇五年トレド管区長在職中に没した。[37]アジアでの宣教経験はなく、イエズス会総長アクアヴィ

ヴァの命を受け、インド、中国、日本でのザビエルの宣教過程、ザビエル死後のイエズス会士らの日本での活動を中心に全十四篇で構成された『東方伝道史』を執筆した。そのため巡察師ヴァリニャーノをはじめとしたイエズス会士の書簡を引用したとされており、[38] イエズス会総会長宛文書で秘匿性の高かった『日本諸事要録』（一五八三年）[39] や既述の『日本イエズス会書簡集』、オランダの旅行家ヤン・ホイフェン・ヴァン・リンスホーテン（Jan Huyghen van Linschoten　一五六三〜一六一一年）が著した『東方案内記』（*Itinerario: Voyage ofte schipvaert van Jan Huyghen van Linschoten naer Oost ofte Portugaels Indien 1579-1592*　一五九六年、アムステルダム）等の記述と類似した箇所が認められる。[40]

『東方伝道史』は一六〇一年にアルカラで出版され、天正遣欧使節がスペインのベルモンテ来訪時、現地学院の総長であったグスマンが使節一行を歓待した記述も第八編に認められる。また、そのバランスの良さから良質な著作として当時より評判を得ていた。日本関連記述は第五篇から第十三篇でまとめられており、これから比較・考察対象とする『東方伝道史』第五篇「会士に依つて日本の諸國に福音傳道の端緒が開かれ、それが日本帝國の首都京都の大都市にまで傳道された事」[41] では、キリスト教日本開教の過程とともに、日本の地理、文化、習慣、宗教が具体的かつ詳細に論じられている。

第二節　「博物誌」に認められる典拠の形態

以上を踏まえて両テキストの具体的な比較に移りたい。「博物誌」における『東方伝道史』第五篇からの引用は、冒頭では数行程度に留まっているものの、[42] 頁を追うごとにその分量は増していき、五行以上の抜粋に近い状態へと移行していく。具体的な比較例として、長文引用の該当箇所であるアマーティによるイタリア語原文の拙訳と、グスマンによるスペイン語原文の新井トシ訳を併記していく。（傍線は強調のため筆者が補足。原文は注参照。）

アマーティ：テキスト①

「日本人は食事をする際に棕櫚の薄いストール（Stole）からできた床に座る。そして銘々に、四角い小さなテーブルがあてがわれ、どんな皿でも異なったテーブルが運ばれる。テーブルクロスや食事の道具には関心が無い。彼らは極めて洗練されている。それは彼らが木の二本のスコップか、一パルモの長さのそれを使って食べ物を掴むからだ。しかもそれらでパン屑が落ちることはない。彼らは牛乳とチーズを酷く嫌う。牛乳が（白色であるのに赤色に変わる血）を含み、生き血をちびちびと飲む時のように、牛乳を飲むことは大変な吐き気を催すことにつながると信じているのだ。同じような嫌悪は、雌牛や去勢羊を食すことにおいても生じる。それはおそらく馬肉でも同様だ。」[43]

グスマン：テキスト①

「彼等は棕櫚の薄い畳の上に坐り、一人一人小さな四角の膳に向かつて食事し、一皿毎に、別の膳で運ばれる。食卓掛、ナプキン、ナイフ、フォクは用ひないが、非常に清潔、清楚を保ち、象牙又は木の一パルモ前後ある二本の箸で食物を取り、これを器用に使つて小しもこぼさない。彼等は牛乳及びそれを材料として作つたものを非常に嫌ふ。牛乳は山羊の血の変色したものとして、我々が生血を飲む人に対するやうに、牛乳を飲む人を忌む。これと同じく牛、羊を食べる事も、丁度我々が馬肉その他の野獣の肉を食べる人に対するやうに吐気を感ずる。」[44]

アマーティ：テキスト②

「日本語が富んでいるのは、特質や優雅さにおけるのと同様に言葉が持つ豊かさにおいて、ギリシア語、ラテン語を凌駕しているというところにある。言語とともに修辞や丁寧な言葉使いも習得する。共同体の人々との言葉、高貴に接するための言葉があり、同じ出来事の対話でも人間の相違に委ねることが出来ないからである。つまり、同じやり取りでも、老人と議論するのと若者と議論するのとでは異なり、いかにも「若者」という言葉を老人に使うと笑いが起きる原因となるのだ。〔中略〕彼らは二つのアルファベットを持っている。一つは単独の文字、もう一方は中国の様式の姿をしたものだ。それらを書く際には、言葉が置かれることがないため、極めて簡潔である。」[45]

グスマン：テキスト②

「日本人の言葉は荘重にして豊かであり、多くの点において、そして一つの事柄を表現する言語のもつその豊饒さにおいても、又その言葉の余韻、優美さにおいてもギリシア、ラテン語を遥かに卓越している。この言語を習うには同時に修辞法と鄭重な言語を習わねば、凡ての人と話すことができない。同じ一つのものでも、非常に異なった言葉がある。したがって貴族に対するものと、一般人又極低い地位のものに対する言葉の差異がある。又老人に対する詞と極若いものに対する言葉がある故に、それを取り違えたり、誤ったりしては人に笑われる。〔中略〕アルファベットには二つの型があり、その一つは単なる文字（表音文字）であるが、他は支那風の字体である。それを書くには文字も言葉も入れない故に至極簡単である……」[46]

以上のようにアマーティ、グスマンの両記述を、注に挙げた原文も参照しつつ比較すると、瞥見した限りでは文の構造はそのままに、原文であるスペイン語からイタリア語に置き換えられただけという印象を強く受ける。十七世紀初頭のコロンナ家はスペイン宮廷との

結びつきを強めており、アマーティもまたコロンナ家家臣としてマドリッドに滞在し、主君フィリッポ・コロンナ一世（Filippo I Colonna）にスペイン語で書翰を認めている。[47] スペイン宮廷からも俸禄を得ていたことを示す記録も残されており、[48] アマーティがグスマンのスペイン語をイタリア語に置き換えることは造作も無いことであったことは間違いないであろう。

アマーティはボルゲーゼ家から「日本略記」執筆の要請を受けて、短期間のうちに書き上げる折に、「博物誌」を効率よくまとめようとしたために、以上のような『東方伝道史』からの抜粋が生じたことも先に触れたとおりである。しかしその一方で、両テキストに対し更に綿密な分析を加えていくと、『東方伝道史』からの抜粋箇所には読み手であるボルゲーゼ家に対して簡潔かつ効果的にヨーロッパのものと大きく異なる日本の文化・習俗を伝えようとしたアマーティの態度が浮き彫りになってくる。

アマーティとグスマンのテキスト①傍線部では、日本人が牛乳に対し血のような印象を抱き、酷く嫌っている旨が記述されている。とりわけ傍線部冒頭においてグスマンは、「乳及び乳から作られるものを尋常ならざるほどに嫌う」（Aborrecen grandemente la leche, y las cosas que se hazen della,）としているのに対し、アマーティは「乳とチーズを酷く嫌う」（Aborriscono il latte, et il cascio,）としており、「乳から作られるもの」（las cosas que se hazen del la）から「チーズ」（il cascio）という、アマーティによる具体性を増した明らかな改編の痕跡が認められるのである。

次いでテキスト②で両者を比較してみるとどうであろうか。スペイン語からイタリア語に翻訳する際に構文を若干変える以外は、内容は一致しており完全な抜粋と思われる。アマーティが「日本略記」執筆を進める折に、テキスト①とは異なり加筆・訂正の必要はないと判断したためであろう。既知の事実であるがイエズス会は各地で布教するに際し、現地語の学習と研究を最重要課題としていた。『羅葡日辞典』（一五九五年）や『日葡辞書』（一六〇三～一六〇四年）、禁教令以後ではあるがジョアン・ロドリゲスによって『日本語小文典』（一六二〇年）が編まれたのはそのためである。アマーティもまたイエズス会ローマ学院で学んでいた時期があったことから、イエズス会のこのような方針を認識していたはずであり、語学に長けていたが故の個人的関心も加味して、上記のように言語と文化の親和性を示唆する記述をそのまま抜粋したものと思われる。

したがってテキスト①、②における抜粋箇所を見比べていくと、短期間のうちに書き上げたとはいえ、グスマンのテキストから単に抜粋することで効率的に日本報告を作成したのではなく、グスマンのテキストを「吟味・峻別」し、適宜に加除筆しつつ精度を高めた報告書を作成しようとしていたアマーティの態度を見て取ることができる。このような「吟味・峻別」する態度は、「日本略記」第二

章に該当する「宗教誌」において、より強く打ち出されていくこととなる。

第三節　「宗教誌」に見るアマーティの著作意図

「宗教誌」におけるグスマンからの抜粋は、より顕著なものとなって表出しており、「宗教誌」の約半分程度がグスマンからの抜粋といっても過言ではない。本項では前節結部で論じたアマーティの「吟味・峻別」の態度を踏まえつつ、「宗教誌」におけるグスマンからの抜粋箇所を分析していきたい。（アマーティの記述は拙訳、グスマンの記述は新井訳。傍線は強調のため筆者が補足。）

アマーティ③

「これと同じ座主（Iaco）が東堂らを選ぶ。東堂とは、大司教や司教のように二番目にくる坊主たちのことで、比較的軽い出来事で許可を与える権限を持っている。「座主」は僧院長の選出を承認する。僧院長は、比較的名のある重要な数々の僧院を統括せねばならない。すなわち、座主は東堂の裁量には、ありきたりで一般的な諸々に承認を与える余地を残しているのだ。これらの高名な坊主たちは大学を持っている。そこで坊主たちは、自分たちの宗派のことを学ぶ。宗派のなかで有名なものは五つ挙げられる。高野、根来、比叡山、多武峰、板東だ。各宗派の大学では、各々三千～四千人の学僧が勉学に鎬を削っている。宗派はそれぞれ異なっているから、坊主たちはそれぞれ異なった服装をしており、異なった儀式を挙げる。彼らの通常の聖務は、死者に対する葬儀を行い、日夜決められた時間に寺院に居て、時禱を唱え、別の勤め（読経）をするといったものだ。すなわち、キリスト教の聖職者が行うように、内陣に列席し、本を読みあげるということだ。[49]」

グスマン③

「この座主自らが主教、副主教にあたるトウンドを選択する。彼等の権限は一般的な些細な事件を処理する事である。座主は有名主要な僧院に坐る僧長の選挙を確認する。そしてこの僧長はトウンドを確認する。この僧侶たちはその宗派を研究する多数の大きな大学を所有してゐる。その著名なものに高野、根来、比叡山、多武峰、坂東の五つがある。この最後のものが一番有名で数多の生徒が修学してゐる。他の四つのものでも、各々三四千人余の制度がゐる。日本には宗派が多く、その宗派の間には大きな差異があるように、僧侶自身の僧衣、儀式も自ら違つてゐる。彼等の常職は葬式、埋葬で、それは巨額の報酬が施与される。僧院では我が国で朝課その他の時間に宗教家たちが諳んずる様な方法で、経文を合唱する。[50]」

アマーティ④

「坊主たちはしばしば非常に華麗に説法を行う。というもの坊主が説教壇に上がるときには絹を身にまとい、片手に金の扇子を携えて、高価なテーブルの前に立つからだ。そこには本が置かれている。幾多の宗派の迷信深い祝賀や、またある時には道徳的な教義を唱え、宣言するためのものだ。それらは、二千～三千人を超える聴衆を何度も泣かせる程、雄弁で効果的だ。説教の目的は、「信仰を立てている宗派を通してのみ、人は救われるのだ」と、聴衆を説得することにある。形式主義のあらゆる偽善が、これら坊主らに叩き込まれているからであり、うわべだけの外見や謙虚で甘美な話し方に目を奪われると、坊主たちが偉大な神性や美徳の備わった人間であるかのように映るからだ。もっとも、彼らは邪悪で、罪に満ちているのだが。[51]」

グスマン④

「彼等は度々荘重な外貌を装つて説教する。即ち説教僧は絹の僧衣をつけ、手には金の扇を持ち、高座又は説教檀の様な高い所に登つて、贅沢な天蓋を吊るした下に卓を置き、その上に書物をのせ、少し読んでは雄弁にそれを説明し、時々通常二千～三千人を越える聴衆を感泣さす。その説教の目的は聴衆に彼等が説く宗派のみが救済を保証する事を説き、引き続き信仰する様にとその宗派を信認さすためである。又これは僧侶の生活及び私服を肥やす収益の一つである。といふのはこの説教は度々行われ、聴衆の人数は多く、各自が幾何かの喜捨をし、説教のある度ごとに集まる金額は非常な額に上るからである。日本の僧侶は宗教の本義を度外視し、形式に拘泥した偽信家が集まつてゐるやうに思はれる。外観から見ると人の応待が鄭重である故に大聖人、有徳者の様に思はれるが、内面は罪科に充ちた不正の生活をしてゐる。[52]」

アマーティ⑤

「この阿弥陀の宗派（浄土宗）は、日本の中では最大規模であって、流布しており、好意的に受け止められている。何故なら、優れた理解力を持った人間が、来世や魂不滅の光を浴び、救済の手段が同様に容易であることも心得ているからで、島（日本列島）の大部分が従っているからだ。阿弥陀の寺院で生活をしている坊主たちは、鐘を鳴らしながら道を進み、これら三つの言葉「南無・阿弥陀・仏」を唱えることが習慣となっている。また以下のことも坊主たちの習慣となっている。かなりの量の施しを集めたら、偶像の図柄が描かれた紙製の衣服を熱心な信者に授けるのだ。そして彼らは以下のことを約束する。その衣服を身に着ければ救われるのであると。[53]」

グスマン⑤

「この阿弥陀の宗派は日本に広く弘布され、繁盛してゐるものの一つである。何故なれば日本人は聡明な国民である故に、来世、霊魂の不滅について何らかの徴候を持つてゐる。それ故に罪障の容赦、救済が容易に約束される教を喜んで迎へるからである。阿弥陀の寺院に住んでゐる僧侶は、鈴を鳴らしながら南無、阿弥、陀仏の三語を高誦して、町を托鉢して廻り、多大な喜捨を受ける。彼等は又熱心な信者に紙で作つた偶像の形をした着物と多くの守礼を与へ、それを受けてゐれば、若し死んでも救はれると保証してゐる。それ故に日本人はそれに多額の金を支払ふ。これは僧侶のよい所得、収益の一つである。[54]」

アマーティ⑥

「法華宗徒は、日本にいる仏教徒のなかで最も強情である。それは彼らが法華経に受け継がれていることや見解を土台にしているからだ。コーランを通して統治されているトルコ人やムーア人のように、彼らは法華経を通して統治されている。議論をすることはなく、偽りを認めることがないから理性を働かせることもない。坊主たちが大変な名声を得ているのは、彼らが救いと天国への道筋に便宜を与え、同時に確心の証として釈迦の図柄が描かれた紙の衣を与えるからである。[55]」

グスマン⑥

「この法華宗の僧侶は、日本中最も頑固な人々である。彼らは法華経の説く信条のみ肯定して、丁度モーロ人のマホメツイ経典に対するが如く、その教を質さず、ただ信従、盲信して他の如何なるものをも正しいとしない。これ等の僧侶も阿弥陀を祀る人々の様に深く畏敬されてゐる。それはいづれのものにも極楽への道が容易に開け、救済が安価に売られるからで、その保証として法華宗の僧侶も亦阿弥陀のそのやうに、同じ価格で紙の着物及び守礼を与へてゐる。[56]」

③、④において注目すべきは、グスマンの記述の傍線部分をアマーティが「宗教誌」において改編・削除している点である。より具体的に言えば、③傍線部では、グスマンによる報酬に関する記述「それにより大金が支払われる」（porque se lo pagan muy bien.）が削除され、アマーティにより仏教の勤行についての記述「すなわち、キリスト教の聖職者が行うように、内陣に列席し、本を読みあげるということだ。」（et altri essercitij; assistere nel Choro, e leggere ne' libri, come fà il Clero Christiano.）に「改編・加筆」された形跡が認められる。

一方でグスマン④傍線部では、「又これは僧侶の生活及び私服を肥やす収益の一つである。といふのはこの説教は度々行われ、聴衆の人数は多く、各自が幾何かの喜捨をし、説教のある度ごとに集ま

る金額は非常な額に上るからである。」（para enriquezerse, y passar su vida: porque como los sermones son muy ordinarios, y los oyentes muchos, y cada vno offrece algun dinero, es mucha la cantidad que suelen recoger cada vez.）とする記述が認められるが、アマーティのテキスト④においては完全に欠落している。グスマン、アマーティ両テキスト④における内容は、上記欠落箇所以外は同一であることから、アマーティにより意図的に「削除」された可能性が極めて高い。

そしてテキスト⑤においても「儲け」や「収益」、「報酬」といった信者と聖職者とのあいだで行われる金銭授受の具体的な記述は「削除・改編」の対象とされており、アマーティの「吟味・峻別」する態度は一層強まっていく。グスマン⑤では、「彼等は又熱心な信者に紙で作つた偶像の形をした着物と多くの守礼を与へ、それを受けてゐれば、若し死んでも救はれると保証してゐる。それ故に日本人はそれに多額の金を支払ふ。これは僧侶のよい所得、収益の一つである。」（y feligreses ciertos vestidos hechos de papel, con el nombre y figura deste Idolo, con otras muchas nominas asegurandoles la saluacion, si mueren con ellas. Por estos vetidos y papeles, dan los Iapones grande suma de dinero, y es vna de las buenas rentas, y grangerias que tienen los Bonzos.）であるのに対し、アマーティ⑤では「また以下のことも坊主たちの習慣となっている。かなりの量の施しを集めたら、偶像の図柄が描かれた紙製の衣服を熱心な信者に授けるのだ。そして彼らは以下のことを約束する。その衣服を身に着ければ救われるのであると。」（E sogliono raccogliere gran limosna e donare alli deuoti alcuni uestiti di carta con l'imagini dell'Idolo [assigurandoli], che se portano quella figura, si saluano.）とだけ記され、仏の図柄が描かれた紙製の着物が僧侶の収益の一つとなっている記述は、アマーティのテキストでは一切削除されている。

アマーティ③、④、⑤のテキストにおいて「吟味・峻別」の意図を探るには、彼の宗教的態度やイエズス会との関係といった背景を押さえておく必要があろう。

アマーティは使節とマドリッドで邂逅する直前の一六一五年二月十二日にマドリッドにおいて『イタリア統一のために』（*Pro Italico Armorum Motu*）[57]という論文を書き上げている。この論文はイタリア統一のためにスペイン王やイタリアの君主たちのなすべきことが、キリスト教を基盤とした平和、平等、正義といった観点から極めて厳格に論じられたものである。次いで、先述したように「政治誌」においてもアマーティはキリスト教を基盤として政治理念を論じていることから、このようなアマーティの宗教に対する厳格な態度が「宗教誌」において「吟味・峻別」、すなわち意図的隠蔽として表出したものと考えられる。

また、グスマンが所属していたイエズス会は、特に日本布教での事例が知られるように、その事業遂行のために貿易を積極的に行っている。イエズス会内部では、天正遣欧使節の世話役として同行し

たディエゴ・デ・メスキータのように修道会の行き過ぎた商業主義に批判的な立場をとっていた者もいた。グスマンに至っては、イエズス会士らの書翰や報告書の類を布教史として手堅くまとめあげる必要があったためと思われるが、儲けや利益に対して自らの主張を織り交ぜるような記述は、ほとんど見受けられない。一方で、アマーティもまたイエズス会ローマ学院を通して、「良心例学」等を用いたイエズス会の布教方針に則った教育を受けていたことは先に述べた通りである。「宗教誌」に見受けられるグスマン記述の削除・改編の第一の要因が、仏教の諸々の記述に認められる生業と宗教の結び付きを匂わせる箇所の暈（ぼか）しであったことは、前述してきたような彼の厳格なキリスト教に対するスタンスや経歴、思想に鑑みれば明らかと言える。しかし、儲けや利益に寛容であったイエズス会の貿易による布教資金獲得に対し賛否がわかれていた状況も加味すれば、アマーティによるグスマン記述の削除・改編に、当時のイエズス会の状況が消極的に反映されていたと解釈しても、あながち間違いではないだろう。一方で「政治誌」には、日本キリシタン教界においてイエズス会とライバル関係にあったフランシスコ会を称揚する記述[58]が認められる。慶長遣欧使節を主導したフランシスコ会士ルイス・ソテーロの影響により、フランシスコ会への賛辞が挿入された可能性も一方にはあるが、この記述からもアマーティ自身とイエズス会との微妙な距離感、ならびに自らの信念に基づいて儲けや利益といった文言を積極的に吟味・峻別した態度を窺い知ることができよう。

さらに、この意図的隠蔽はグスマン、アマーティ両テキスト⑥において、より具体性を増していく。グスマン⑥後半部において「これ等の僧侶も阿弥陀を祀る人々の様に深く畏敬されてゐる。それはいずれのものにも極楽への道が容易に開け、救済が安価に売られるからで、その保証として法華宗の僧侶も亦阿弥陀のそのやうに、同じ価格で紙の着物及び守礼を与へてゐる。」（Son tenidos estos Bonzos entanta veneracion como los que adoran el Idolo de Amida, porque los vnos y los otros hazen muy facil el camino de su parayso, y venden barata la saluacion, y para asseguralla, dan estos Bonzos Foquexus, tambien sus vestidos de papel, y nominas por el mismo precio que los de Amida.）とされており、カトリックによって行われていた贖宥状販売を想起させる記述となっている。一方アマーティ⑥では、「坊主たちが大変な名声を得ているのは、彼らが救いと天国への道筋に便宜を与え、同時に確心の証として釈迦の図柄が描かれた紙の衣を与えるからである。」（I Bonzi son tenuti in gran reputatione, perche facilitano il Camino della salute, e del paradiso, dando anche loro uestiti di carta con la figura di Iaca per certezza.）といったように「釈迦の図柄の描かれた衣」の価格や販売について記述等が大幅に削除され、坊主たちの具体的な記述も簡便にまとめられあげられており、グスマンの記述にあるような贖宥状販売を連想させる文言は巧みに

隠蔽されているのがわかる。そしてアマーティ⑤では、浄土宗における守礼販売の記述に対するアマーティの改編は、若干手を緩めている印象を受けるが、議論が進むにつれて、つまりアマーティ⑥では贖宥状販売をイメージさせる文言の意図的隠蔽の傾向が強まっている点は留意しておきたい。

既知の事実であるが、一五六三年に終了したトレント公会議では、聖職者の世俗化防止、贖宥状の有効性は認めつつも、その販売禁止が取り決められている。この歴史的事実を考慮すると、これまで確認してきたアマーティによる意図的隠蔽は、贖宥状販売や安易な金儲けに走る聖職者の世俗化に対する否定的な態度の一種の表れであり、一六三〇年代になって教皇庁主席書記官（Protonotario Apostolico）にまで上り詰めたアマーティによる、カトリックの主張としてのトレント公会議での決定を遵守せんとする厳格な態度の顕現とも捉えることができよう。

以上、アマーティとグスマンのテキストを併記して比較・検討を加えることにより、アマーティが「宗教における利益」に対し、極めて否定的な態度を示していたことが明らかとなった。「日本略記」は『伊達政宗遣欧使節記』を脱稿してから日を置かずして執筆されたものであり、急ぎボルゲーゼ家に本著作を献呈せねばならぬ状況にあって、内容の中核とした「政治誌」以外は『東方伝道史』から多く抜粋されたものと思われる。したがって短期間のうちであっても「儲け」や「利益」、「報酬」といった特定の文言に「吟味・峻別」を加えることで、若干の揺らぎを伴いながら「削除と改編」を施し、典拠先の記述を意図的に隠蔽したアマーティの記述には、一定の強い意思が働いたと考えるのが妥当であろう。つまり、アマーティは以上のような意図的隠蔽をテキスト内に巧緻に組みこむことで、日本における宗教のありようから、生業としての利得の絡まないキリスト教の理想をボルゲーゼ家に伝えようとしたのである。そして、ここからアマーティの日本観ならびに、キリスト教と深く結び付いた彼の政治理想が逆説的に浮かび上がってくると言えよう。

おわりに

本論文前半部において、「日本略記」が上梓された一六一五年当時は、ボルゲーゼ家出身のパウルス五世が教皇の座についていた時期であり、ボルゲーゼ家が宣教師報告を通して海外情報を入手しやすかった背景を踏まえつつ、ボルゲーゼ家側が日本の統治機構への理解を深めるために、アマーティに対し執筆を指示、つまり情報の供給を促し、アマーティは「日本略記」を献呈することでその需要に応えようとした知的需給関係の可能性を指摘した。本論文後半部では、まず来日イエズス会士の情報がボルゲーゼ家に伝わる過程の最終段階を、アマーティの「削除・改編」という視点から分析を加

えた。そのうえで「吟味・峻別」にはじまり改編・削除を経て意図的隠蔽へと至る過程が、当時の異文化情報の伝播、知識の需給という点において非常に重要であることを見出した。これは、ローマの新興有力家系であるボルゲーゼ家が得た日本情報が、日本で活動するイエズス会士から直接得られたものではなく、グスマンやアマーティなど日本人とヨーロッパで接触しつつも来日経験のない人間による編集を経て得られた間接的な情報であり、その伝達の過程において、複数の執筆者によって幾重にも改編が重ねられ、各々の意図が複合的に組み込まれていた可能性にも繋がっていく。日本情報受容過程の最終段階において、アマーティの明確な意思で以って「削除」、「改編」が行われ、それが日本情報として最終受益者であるボルゲーゼ家に供給されたことが明らかになったと言えよう。この意味においては、十七世紀イタリアの異文化受容を解き明かす上で、重要な視点を提供できたのではないかと思われる。

冒頭で「仲介者」について若干触れたように、十七世紀ローマ近郊有力者の異文化受容では、宣教師のように直接的に異文化に触れた者のみならず、グスマンのように間接的に異文化に触れた者、アマーティのように使節折衝役という稀有な立場から異文化に触れた者など、数こそ少ないが多様な「仲介者」が存在していたのだ。

注

（1）筆者の調査によるとコロンナ文書館には一六五三年以降のアマーティの書簡は認められない。

（2）*Historia del regno di voxu del Giappone: dell'antichita, nobilta, e valore del suo re Idate Masmune, delli favori, c'ha fatti alla Christianita, e desidero che tiene d'esser Cristiano, e dell'aumento di nostora santa Fede in quelle parti. E dell'ambasciata che hà inviata alla S.ta. di N.S. Papa Paolo V. e dellli suoi successi, con alter varie cose edificazione, e gusto spirituale de i lettori. Dedicata alla S.ta di N.S. Papa Paolo V.* Fatta per il Dottor Scipione Amati Romano, Interprete, & Historico dell' Ambasciata. In Roma, Appresso Giacomo Mascardi. MDCXV. Con licenza de' Superiori. 仙台市博物館蔵。

（3）石鍋真澄、石鍋真理子、平田隆一（共訳）「伊達政宗遣欧使節記」『仙台市史　特別編八　慶長遣欧使節』宮城県教科書供給所、二〇一〇年、二八頁―九八頁。

（4）平田隆一「アマーティ著『伊達政宗遣欧使節記』の成立と展開」『仙台市史　特別編八　慶長遣欧使節』、五四一―五四六頁。

（5）*Breve Ristretto delli trè Stati Naturale, Religioso, e Politico del Giapone, fatto, et ordinato dal Dottor Scipione Amati Romo interprete, e Relatore dell'Ambasciata del Rè Idate Masamune Rè de Voxu regnãte nel Giapone,* Fondo Borghese Serie I, 208-209, 51r-90r, Conservato presso l'Archivio Segreto Vaticano.『日本の自然、宗教、政治、その三つの状態についての簡便なる記述　企画、執筆　日本に君臨する奥州国国王、伊達政宗の使節の通訳兼報告者シピオーネ・アマーティ』。

（6）Scipione Amati *Considerationi di stato sopra le cose d'Italia*『イタリア諸事情の考察』Roma, 1640, manoscritto, Scipione Amati, *Laconismo politico sopra il consiglio di coscienza, che combatte la ragione di stato*『沈着なる政治家――国家理性との戦い、その合議について――』Roma, L. Grignani, 1648.

（7）Conte Giammaria Mazzuchelli *Gli Scrittori d'Italia,* Brescia, Giambattista Bossini, 1753. p.598. アマーティが語学堪能にして実務能力に長けた法律家であった

collegio romano, Villoslada, Ricardo. Garcia, Pontificia Università Gregoriana, Roma, 1954, p.325. つまり、*Societ. Colleg.* はローマ学院を指すものと思われる。さらにアマーティの著作『フランチェスコ・セスティーニ・ダ・ビビエーナ著「侍従長」への批判』（*Censura al Maestro di Camera di Francesco Sestini da Bibiena* 1634）には、表紙下に "Biblioth^{a}: Sec: Coll: Rom: Soc: I: Cat^{o}: ad scipo:" という後年のものと思われる加筆も認められるため、彼がローマ学院に何らかの形で関与していた可能性は極めて高い。

（15） 前掲「評価書」三裏 "Sensus Politicos super Annales Cornel' Tacito. et Historias, nec non documenta status duodeci' super Regimine Italia conscripsit. Sunt revisa, et approbata ab ecc.^{a} ut edantur, Ea, Hispaniaru' ad Regia' profectus, Regiu' Privilegiu' i' primendi obtinuit." 前述したように、『伊達政宗遣欧使節記』の「読者へ辞」末尾にも同様の記述が認められる。「タキトゥスの年代記について、その情勢、政治観念の諸問題を印刷する特許を当局から得た。その後、この使節に通訳兼報告者として貢献することになった。" "doppò hauer impetrato priuilegi da Sua Maestà Cattolica di poter imprimere alcune materie di stato, & i sensi politici sopra gl'Annali di Cornelio Tacito, che spero nel Signore sarà presto, hebbi occasione di seruire a questa Ambasciata d'Inteprete, e Relatore come l'hò fatto con ogni fedeltà, e lontano da tutti gl' interessi da Madrid sin' à Roma;"

（16） *Pro Italico Arumorum Motu, Ad Hispaniarum Regem, Ad Sabaudia' Ducem, Ad Italia' Principes, Paranetica Sententia, Propositiones disputativa', ex ed collecta' XXXVI. Scipione Amati V.D. Ill^{mi}. D'ni Don Petri Celestris Santae Crucis Marchiones E' questris Ord Sa'cti Jacobi Bellici Reg' Maiestatis Cath^{ca}. Consiliariy: Magni Sicilia' Questoris: ac eiusd. Regni ad Sane Hispaniaru' Regia' Oratoris Ab Epistolis.* 書簡集（Codici. Manoscritto）コロンナ文書館。

（17） 前掲「評価書」四表 "Roma edidit Historia legationis et Regni Regis Voxij una cu' oratione precu' demconfecta, et in pub.^{co} consistorio habenda Paulo.V. P. Mar.^{o} dicavit. A sa'ctitate sua Portione' 75. ducatus auri de auro accepit." 『伊達政宗遣欧

点、慶長遣欧使節の随行員として『伊達政宗遣欧使節記』を上梓した点が記載されている。なお、このアマーティの記述は、フランスの人名辞典 *Nouvelle biographie générale*（M. Hoefer, Paris, MM. Firmin Didot Fréres, 1858, p.802.）でも引用されているが、現在も編纂中のイタリアの人名辞典 *Dizionario biografico degli Italiani*（Alberto M. Ghisalberti, Istituto della Enciclopedia italiana, Roma, 1960）には引き継がれていない。

（8） マドリッドでカスティリャの提督の母、ドンナ・ヴィットーリア・コロンナの邸に住まい、提督の秘書官ドン・ベルナルディーノ・マリアーニと組んで、タキトゥスの年代記について、その情勢、政治観念の諸問題を印刷する特許を当局から得た。その後、この使節に通訳兼報告者として貢献することになった。『伊達政宗遣欧使節記』「読者への辞」の末尾。

（9） Tommaso Bozza *Scrittori politici italiani dal 1550 al 1650,* Roma, Edizioni di storia e letteratura, 1949, p.193. ボッツァは上記著作内で「アマーティがコロンナ家に長く仕えた」とだけ指摘している。

（10） Luis de Guzman *Historia de las misiones ue han hecho los religiosos de la Compañia de Iesus: para predicar el sancto Evangelio en la India oriental, y en los reynos de la China y Iapon*, Alcala, 1601. 新井トシ訳『東方傳道史』天理時報社、一九四四年。

（11） ステイーヴン・グリーンブラット『驚異と占有』荒木正純訳、みすず書房、一九九四年、一八九―二三八頁。

（12） 異文化を媒介する「仲介者」"go between" の存在を取り上げ、大航海時代当時における異文化情報の伝達について論じている。

（13） Considerationi civili sopra della promotione del Dottor Scipione Amati al Vescovato de Veroli. トリヴィリアーノ書簡集（Trivigliano. Corrispondenza）コロンナ文書館蔵。

（14） 前掲「評価書」三表 "Casus et Conscientia' sub Patre sa'ctarillo in Societ. Colleg. audivit."『ローマ学院の歴史』には、サンタレッロは、一六〇四年から一六〇七年にかけて良心例学の教授であったとの記載がある。*Storia del*

使節記』を指していると思われる。

（18）前掲「評価書」四表 “Libellu’ de state Naturali, Religioso et Politico Iaponici Regni et Imperij Ill.mo D. card.li Burghesis dicavit, donavit.” なお慶長遣欧使節に関する記述では、具体的な年代は明示されていない。

（19）前掲「評価書」四表 “Pro expedienda legatione Paulu’. V. de secretiori legationis sensu, ac politico Regis Voxij arcano, scripto quodam satis erudito, et secretu’ informavit, Scipione Cobellucio, et Joe’ Bap’ta Costacuto tantu’ conscijs.” 慶長遣欧使節は、奥州への宣教師派遣、メキシコとの通商関係確立を目的に派遣された。しかし日本でのキリシタン弾圧、奥州を治める伊達政宗が日本の一領主にすぎないこと等々、スペイン宮廷は把握しつつあった。当然ながらスペイン宮廷との外交交渉は不調に終わり、使節一行はそれらの仲介をカトリックの権威であるパウルス五世に求めたのであった。これらの情報が使節にとって不都合だったのはいうまでもない。アマーティは、使節を主導したフランシスコ会士ルイス・ソテーロ、及びスペイン宮廷の側近から以下のような情報を得るとともに、それらをパウルス五世に伝えたものと考えられる。『伊達政宗遣欧使節記』第二十六章 にも同様の記述がある。併せて参照されたい。「（ボルゲーゼ）枢機卿は先遣隊長で教皇聖下の侍従官であるいとも尊きコスタグート殿とパオロ・アラレオーネ殿に、使節を接待する準備をし、しかるべき交誼を尽くすよう命じた。そこで両人はアラチェーリ修道院に足を運んで、信任状を持って派遣されたフライ・ファン・ソテロ神父（Padre Fra Giovanni Sotelo Fratello）とシピオーネ・アマーティ博士と協議し、使節と随行員一行についての情報を収集した。」（前掲書「伊達政宗遣欧使節記」七七頁、原文五五頁抜粋。）

（20）小川仁「コロンナ家と天正・慶長遣欧使節――コロンナ家の日本関連情報収集の視点から――」『スペイン史研究二八号』所収、二〇一五年、三二頁。

（21）ヴァチカン文書館蔵、Fondo Borghese Serie I, 208-209, ff.51r-56v.

（22）*Ibid.*, ff.57r-57v.

（23）*Ibid.*, ff.68r-90r.

（24）Amati *Stato Naturarie*, f.53v. “Secondo che mutano l’età, mutano i uestiti; et in due giorni designati dell’anno si uestono tutti d’estate, e d’inuerno.”

（25）Amati *Stato Naturarie*, f.54v. “I denti negri sono i più stimati trà nobili. Il color negro trà loro è segno d’allegrezza, il rosso di malinconia.”

（26）Amati *Stato Religioso*, ff.57-58v.

（27）Amati *Stato Religioso*, f.64r.

（28）Amati *Stato Religioso*, f.69v.「このような絶対的政治形態は、日本の市民・政治体制を支配する内裏の力に拠るものである。これは長く続く時の中で、古代ギリシア人、スパルタ人、ローマ人らのどの君主国をも凌ぐまでに至った。」“Questa forma di gouerno assoluto in Persona del Daire sopra lo stato politico e Ciuile del Giapone hà superato per continuata lunghezza di tempo tutte le Monarchie de greci, di lacedemoni, e de Romani;”

（29）Amati *Stato Politico*, f.78r.「かなり驚くべきことに、日本は周囲に対しても広範な権力を保持している。北の海に目を向けると、大タタールや大中国にも同様のものが見られ、南に目を向ければシャムやペグーの帝権にも同様のものがみられるのだ。」“recando non poca merauiglia, che tenendo il Giapone all’Intorno Imperij cosi uasti come è quello del gran Tartaro, e del gran Chino per il Mar del Norte, e per il Sus l’Imperio del Sian, e del Pegu,”

（30）Amati *Stato Religioso*, f.58v.「内裏は地位、品格、責務を定め、以上のような支配とともに、その必要性に配慮し、教皇のような頭領となり、公家を枢機卿とほぼ同等の偉大さ示すものと定めた。」“(Daire) Ordinò i gradi, le dignità, e l’officij, con il quale dominio remediò à sua necessità e si fece presidente come Papa, et ordinò ch’i Cungi rapresentassono quasi la medesma grandezza, ch’i Cardinali.”

（31）Amati *Stato Politico*, f.82v.「王ら銘々が自らの国を保持しつつ、政治体制において正統なる君主として皇帝を承認するのは、キリスト教徒の君主たちが幾つかの出来事の中でドイツの皇帝を承認するのが常態化しているのと

同様である。」“perche retenendo ciascuno il suo Regno, e reconoscendo l'Imperatore per legitimo signore nel gouerno politico, come i Principi christiani sogliono in alcune cose riconoscere ’Imperatore di Germania,” 神田千里『宗教で読む戦国時代』講談社、二〇一〇年、一七―二三頁。

(32) Fondo Borghese Serie IV, 3　手稿。

(33) Fondo Borghese Serie Ia, 10　手稿。

(34) Fondo Borghese Serie I, 513　手稿。

(35) Maria Antonietta Visceglia, *Papato e politica internazionale nella prima età moderna*, Viella, 2013.『近世初期における教皇庁と国際政治』

(36) コインブラ版一五七〇年出版、エヴォラ版一五九八年出版。

(37) 新井トシ訳『東方傳道史』天理時報社、一九四四年、九頁（新井トシによる評伝）。

(38) アルバレス・タラドリス、ホセ・ルイス「グスマンの「東方伝道史」にうつされたバリニアーノの「弁駁論」について」『サピエンチア　英知大学論叢』二十四号、一九九〇年、一九一―二〇八頁。

(39) グスマンはイエズス会総会長の勅命である布教史『東方伝道史』執筆のため、『日本諸事要録』を容易に閲覧できたと思われる。

(40) 『諸事要録』や未刊のイエズス会文書の他にも、グスマンが書翰集や旅行記等の刊本を中心に引用することで『東方伝道史』を編纂し、アマーティが『東方伝道史』から多く引用することで「日本略記」を著したとする、当時の布教史、報告書の類の執筆モデルの一端を推し量ることができる。

(41) Libro qvinto como se Dio principio ala predicacion del Santo Euangelop, en los Reynos de Iapon, por medio de los Padres de la Compañia de Iesus, hasta llegar a la grande Ciudad de Meaco, Cabeçade toda la Monarchia de Iapon. 訳文は新井トシ訳前掲書『東方傳道史』より。引用に際して、漢字は新字体に変えた。

なお、本論文で取り上げる第五篇の考察対象は以下の通りである。

第一章　日本の土地、地勢及び分割にされてゐる諸国について

Capitvlo I. De la tierra de Iapon, y sdus calidades, y los muchos Raynos en que esta diuidia.

第二章　日本人特有の風習に就いて

Capitvlo II. De algunas costumbres particulares que tienen los Iapones.

第三章　日本人の性質及び特有性

Capitvlo III. De aigunas otras condiciones y propriedades particulares de los Iapones.

第四章　日本の世俗的な生活をする人々の諸型に就いて

Capitvlo IV. De los diuersos estados de gente que ay en Iapon, entre los seglares.

第五章　日本に多数ゐる僧侶及び司祭に就いて

Capitvlo V. De los muchos Bonzos y Sacerdotes que ay en Iapon.

第六章　日本の主なる宗派

Capitvlo VI. De algunas sectas principales de Iapon.

第七章　最初の三派より分かれた他の特殊な宗派に就いて

Capitvlo VII. De otras sectas particulares, salieron de las tres primeras.

(42) 日本、琉球、マカオの位置関係・距離、他人の家を訪問する際にヨーロッパ人が帽子を取るように日本人は靴を脱ぐ等、両著作には短文ながらも構文レベルでの一致が認められる。

(43) Amati *Stato Naturale*, f.54r. “Volendo magnare se pongono à sedere nel pauimento sopra di stole finissime di palma, e ciascuno tiene una tauoletta quadrata e (per qualsiuoglia) piatto, porrano tauoletta differente non curandosi di touaglie, ne (seruigliotte). Sono politissimi, perche pigliano le uiuande con due palette di legno, ò d’ (esso) poco più longhi d’un palmo senza che le cadi una mollica. Aborriscono il latte, et il cascio, credendo, ch’ il latte sia sangue mutato in colore rosso de bianco, e causa in loro tanta nausea il beviirlo, come causarebbe il sorbire sangue crudo Il medesmo aborrimento tengano nel magnare carne di uacca ò di castrato, come di forse carne di cavallo.”

(44) 新井トシ、前掲書、四五八―四五九頁。Guzman, *op. cit.*, p.391. “sientanse en

el suelo sobre esteras muy finas de palma, y cada vno come en su mesilla pequeña y quadrada, y para cada plato, traen mesa differente: no vsan manteles ni seruilletas, cuchillo ni cuchares: y con todo esso, guardan muy grande limpieza, y modestia, porque toman lo que hande comer con dos varillas de madera, ò de Marsil, poco mas largas que vn palmo, y tienen ya en esto tanta destreza, q' no seles cae vna migaja. Aborrecen grandemente la leche, y las cosas que se hazen della, porque estan persuadidos, que la lache es la sangre de las ouejas, mudado el color, assi les causa tanto horror el comella, como a nosotros el beuer sangre cruda. El mismo asco tienen en comer carne de vaca, ò carnero, como le tendriamos nosotros en comer de vn cauallo, ò de orta bestia semejate." リンスホーテン『東方案内記』（『大航海時代叢書VIII』、岩波書店、一九六八年、二五〇頁）に同様の記述が認められる。"they doe lilewise refuse to eate Milke, as wee doe bloud, saying that Milke although it is white, yet it is varie bloud." 英訳版 *The Voyage of John Huyghen Van Linschoten to the East Indies,* John Wolfe, London,1598, p.44.

（45） Amati *Stato Religioso,* f.56r, "È copiosa de maniera, che uantaggio la greca, e la latina tanto nella abondanza, che tiene de uocaboli, come nella proprietà, et eleganza. Con la lingua s'impara Rettorica, e parlar polito, perche raggionamento di una cosa medesma, non se può accommandare à diuisità di (Persone), trauandosi uocaboli per trattare con la nobilità, e uocaboli con la gente commune; Con i uecchi discorrono sopra un' (istesso) negotio differentemente, che con i giouani; e quando ai uecchi si attribuissero i uocabli, che son proprij della gioventù, causarebbe gran riso.... (Tengono) due Abecedarij; uno de sole lettere, l'altro di figure à modo della china. Sono breuissimi nel scriuere perche non pongono parola"

（46） 新井トシ、前掲書、四六〇―四六一頁。Guzman, *op, cit.,* pp.392-393. "Il lengua de los Iapones es muy grave y copiosa, y en muchas cosas haze ventaja a la Griega y Latina: assi en la abundancia que tiene de vocablos para dezir vna misma cosa, como en la propriedad y elegancia dellos. Deprendese con esta lengua, juntamente Rethorica y buena crianza, porque no se puede hablar con todas personas, aunque sea de vna misma cosa, sino con muy differentes palabras, y assi las tienen para tratar con la gente noble, y para con la gente comũ y mas ordinaria, vnos vocablos para tratar con los viejos, y otros para los que son de menos edad, y quien los trocase, ò mudase, se reyrian del: y de aqui es,... Tienen dos maneras de Abece darios, vno es de solas letras, y orto de figuras, al modo de los Chinas,: son breuissimos en secriuir, porque no ponen letra ni palabra" 極めて類似した記述がヴァリニャーノ『日本諸事要録』「第二章 日本人の他の新奇な風習」の末部にも認められる（ヴァリニャーノ著『日本諸事要録』松田毅一他訳、平凡社、一九七三年、一二六頁。Alejandro Valignano, editados por Josè Luis Alvarez-Taldariz, *Sumario dekas cisas de Japon (1583) Adiciones del Sumario de Japon (1593),* Monumenta Nipponica Monographs No.9, Sophia Univarsity, Tokyo, 1594, p.53.）。

（47） シピオーネ・アマーティ筆、マドリッド発信、フィリッポ・コロンナ一世宛書翰が二通（一六一四年二月十三日付、一六一五年二月十三日付、フィリッポ・コロンナ一世宛書翰集、原文スペイン語）、コロンナ文書館に残されている。

（48） バルトロメオ・トゥールコ（Bartolomeo Turco）筆、ローマ発信、一六一六年一月十日付、フィリッポ・コロンナ一世宛書翰集、原文イタリア語、コロンナ文書館蔵。

（49） Amati *Stato Religioso, op, cit.,* ff. 60v-61r. "Questo medesmo Iaco elige i Tondi, che sono i secondi Bonzi come Arciuescoui, e Vescoui, i quali tengono auttorità di dispensare nelle cose più leggieri. Il Iaco confirma l'elettione del superiore, c' hà da gouernare i Monasterij più famosi, e principali; lasciando alla facoltà de Tondi approuare i più communi et ordinarij. Tengono questi bonzi insigni Vniuersità, doue studiano le lor sette, trà quali cinque sono le famose, Coya, Nengura, Ieyzan, Taninominee, Vandore, concurrendo allo studio trè, e quattro mila studenti per ciascuna. Come le sette sono differenti, cosi i Bonzi uestono diuersi habiti, fanno

diuerse cerimonie. L'officio ordinario loro è di far l'essequie à morti, di trouarsi alli te' pij à sue hore determinate di giorno, e di notte, contar sue hore , et altri essercitij; assistere nel Choro, e leggere ne' libri, come fà il Clero Christiano."

（50） 新井トシ、前掲書、四六五頁。Guzman, *op, cit.,* pp.396~397. "Este mismo Iaco elige los Tuondos, q' son ortos Bonzos como Obispos y Arçobispos, los quales tienen potestad de dispensar en cosas mas liuianas y ordinarias. Tambian confirma el Iaco las elecciones de los superiores que han de gouernar los monesterios mas famosos y principales, porque los demas surperiores confirman los Tuondos. Tienen estos Bonzos muchas y muy grandes vniuer sidades, donde estudian susu sectas. Las mas insignes son cinco, y se llaman Coya, Nenguru, Feyzan, Taninomine, Vandou, y esta vltima tienen por mas principal de todas, y donde ay mayor concurso de estudiantes: aunque en cada vna de las otras quarto, passa el numero dellos tres y quatro mil. Assi como sectas de Iapon son muchas y differentes entresi, lo son tambien los mesmos Bonzos en el habito y ceremonias. Su officio ordinario, es hazer las exequias y enterramientos delos duffuntos, porque se lo pagan muy bien. Dentro de susu monesterios, suelen cantar a choros, leyendo por sus libros, al modo que los Sacerdotes y Religiosos de por aca dizen los Maytines, y las demas horas." 座主についての記述は『日本イエズス会書簡集』所収、一五六一年十月八日付トレス書簡に類似の記述が認められる（松田毅一『十六・十七世紀イエズス会日本報告集第Ⅲ期第一巻』同朋社、一九九七年、三三八頁。*Cartas que os padres e irmãos de Companhia de Iesus,* Evora, 1598, f.74r.）。高野、根来、比叡山、多武峰、坂東等の教育機関の説明については、『日本イエズス会書簡集』所収、一五四九年十一月五日付ザビエル書簡に同様の記述が認められる（『十六・十七世紀イエズス会日本報告集第Ⅲ期第一巻』、五七一五八頁。*Cartas que os padres e irmãos de Companhia de Iesus,* f.14v.）。

（51） Amati *Stato Religioso*, *op, cit.,* ff.61r-61v. "Predicano spesso, e con gran apparato: perche salendo un bonzo nel Pulpito, uà uestito di seta, e con un uentaglio d'oro nella mano, tenendo auanti una ricca tauola nella quale stà posto un libro per leggere, e dechiarare le superstitiose cerimonie delle sette, et alcuna uolta dottrina morale con tanta eloquenza, et efficacia che fannno spesso piangere l'auditorio, ch'eccede il numero di due, ò tre mila persone. Il fine del sermone è di persuadere all'(audienza), che solo se può un'huomo saluare per mezzo di qualla setta, che professa. Perche se sia trasfuso in questi Bonzi tutta d'Hipocrisia delli farisei, perche mirando all'habito esteriore, alla modestia, e dolcezza di parlare, paiono huomini di gran santità, uirtù, doue che sono i più uitiosi, e pieni di peccati."

（52） 新井トシ、前掲書、四六五―四六六頁。Guzman, *op, cit.,* p.397. "Predican tambien muy de ordinario, y con grande aparato exterior, porque se sube el predicador en vn lugar alto, a modo de plupito, ò cathedra, vestido de seda, con vn ventalle de oro en la mano. Tiene delante puesta vna mesa con vn rico dosel, y encima su libro, por el quel va leyendo vn poco, y despues lo declara con tantas razones y eloquencia, quea algunas vezes hazen llorar el auditorio, que passa de ordinario, de dos y tresmil personas. El sin que tienen en estos ser mones, es persuadira a los oyentes, que en sola aquella secta que cada vno predica, se pueden saluar, procurando, acreditarla, para que la sigan; u es vna de las grangerias que uenen estos Bonzos, para enriquezerse, y passar su vida: porque como los sermones son muy ordinarios, y los oyentes muchos, y cada vno offrece algun dinero, es mucha la cantidad que suelen recoger cada vez. Parece que se junto en estos Bonzos de Iapon, toda la hypocresia de los Phariseos, porquye mirando su comopostura exterior, su blandura en el hablar, y tratar con todos, parecen hombres de grande sanctidad y virtud: y son los mas vicios, y llenos de pecados, que ay en aquella tierra." この部分については、『日本イエズス会書簡集』所収、一五六五年二月二十日付フロイス書簡に同様の記述が認められる（『十六・十七世紀イエズス会日本報告集第Ⅲ期第二巻』、*Cartas que os padres e irmãos de Companhia de Iesus.* f.176v.）。

（53） Amati *Stato Religioso*, *op, cit.,* f.64r. "Questa setta d' Amida è la più grande, Dilatata,

e fauorita del Giapone, perche come gente di buono intendimento tiene alcun lume dell'altra uita, e dell' immortalità dell'anima, e uedendo, ch'il mezzo della saluatione è cosi facile, è seguito dalla meglior parte dell' Isola. I Bonzi, che uiuono ne' tempij d'Amida sogliono andar per le strade sonando un Campanello, e canta'do quelle trè parole, Namu, Amida, Buth. E sogliono raccogliere gran limosna e donare alli deuoti alcuni uestiti di carta con l'imagini dell' Idolo (assigurandoli), che se portano quella figura, si saluano."

（54） 新井トシ、前掲書、四六八頁。Guzman, *op, cit.,* p.399. "Esta secta de Amida, es vna de las mas estendidas y fauorecidas que ay en Iapon, porque como son gente de buenos entedimientos, tienen algun rastro de la orta vida, y de la inmortalidad del alma, y como les prometen tan barata la saluacion, y el perdon de sus pecados, huelgan de recebirla. Los Bonzos que viuen en los Templos de Amida, suelen andar porlas calles tañendo vna campanilla, y cantando aquellas tres palabras, con lo qual recogen mucha limosna. Tambien dan a sus deuotos, y feligreses ciertos vestidos hechos de papel, con el nombre y figura deste Idolo, con otras muchas nominas assegurandoles la saluacion, si mueren con ellas.Por estos vetidos y papeles, dan los Iapones grande suma de dinero, y es vna de las buenas rentas, y grangerias que tienen los Bonzos"

（55） Amati *Stato Religioso*, *op, cit.,* f.65r. "Foquexus sono i più ostinati, che siano nel Giapone, perche solo si fondano nell'opinione, e eredito, che tengano al libro foque per il quale si gouernano, come i Turchi e Mori per l'Alcorano, senza uoler, dispatare ne sentir raggione per non esser conuinti di falso. I Bonzi son tenuti in gran reputatione, perche facilitano il Camino della salute, e del paradiso, dando anche loro uestiti di carta con la figura di Iaca per certezza."

（56） 新井トシ、前掲書、四六九頁。Guzman, *op, cit.,* pp.399-400. "Estos Bonzons Foquexus, son de los mas obstinados q'ay en Iapon, porque solo se fuda en el credito y opinion que tienen de su libro Foque, porel qual se rigen, como los Moros por su Alcoran, sin quere admitir razon para ninguna cosa, porque fa climente se hallan atajados, y conuencidos sin tener que responder. Son tenidos estos Bonzos entanta veneracion como los que adoran el Idolo de Amida, porque los vnos y los otros hazen muy facil el camino de su parayso, y venden barata la saluacion, y para asseguralla, dan estos Bonzos Foquexus, tambien sus vestidos de papel, y nominas por el mismo precio que los de Amida."

（57） コロンナ文書館蔵, IIA 56-12, 1617-1775, miscellanea.

（58） Amati *Stato Politico*, f.90r. "E come trà tutti gli ordini di Religioni Christiane, che sono state e sono le (colonne) della Chiesa per l'eminenza de Dottori, che l'hannoillustrata, niuna è più remota dalle cose terrene, e beni transitoriy del mondo, che la santa religione Franciscana che come fertilissima pianta s' è dilatata per tutta la terra habitata; cosi à lei piu che à niun'altra concione per raggione di politica spirituale, e positiua seminare in quell'Isola la santa parola de Dio, raccogliere il frutto della conuersione, e porlo nel gremio della Chiesa poiche l'habito, i costumi, et il fine, che mostrano non solo non reca sospetto, e gelosia ai Regnanti, ma serue di consolatione, e d'esse'pio alla plebe. uedendo chequelli, che predicano le cose eterne sono lontani dalle terrene, e che con l'opre authenticano la dottrina del sunto euangelio, che piaccia à Dio, che si dilati per tutto il mondo: sotto il felicissimo Imperio della santità di N'ro Signore Papa paolo Quinto."「なによりもキリスト教の修道会らは、それを説明する学者らの優秀さによつて維持されていて、（キリスト教）教会の柱となつているのだ。そして聖フランシスコ修道会以上に、世事からも移ろい易い世の善からも隔たつているものは存在しないのだ。極めて豊かな樹木が地上の住民たちくも葉を広げるのと同様に、雄弁さに関してはフランシスコ会の右に出るものはなく、霊的で積極的な政治の理を通して、この島において神（Dio）の聖なる御言葉を広め、改宗という名の成果をものにし、それを教会にぎつしりと詰め込むのだ。その結果、フランシスコ会士らが示す性質、習慣、目的は、疑念と妬みというものを継承することはなく、それよりもむしろ、慰めに仕えることになる。例えば大衆に対する慰めだ。

そして、以下のようなことが解る。これらフランシスコ会士が永遠なるものを唱導し、俗世とは距離を置き、その御業でもって福音の概略であるカトリック要理を認証するということだ。カトリック要理は神（Dio）が好まれるものであり、我が主、教皇パウルス五世のいとも幸多き聖なる御威光の下、世の隅々にまで広められるのである。」